

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	東條美智子 坂本美恵, 名山泰子
学力向上推進員	指導教諭(教務課長)	山田千代
委員	指導教諭(企画総務課長) 教諭(学部長) 教諭(進路指導主事) 教諭(教務主任)	中田聖子 (小)中村敏恵 (中)四宮美和子 (高)宮城利恵 宮本洋子 (小)沖 美香 (中)久米清一 (高)林朱美

2 学力・学習状況における現状分析, 目標等

【3つの視点】

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

(I・II 類型) 児童生徒の状況		
よさ	友だちとの関わりを好み, 自分から関わったり, 思いやりのある言葉で話しかけたりすることがある。場面は限定されるが, 困っていることや自分の気持ちを伝えることができる。興味関心のあることや目標に対して, 意欲的に取り組むことができる。	課題 生活経験が少ない児童生徒ほど, 挨拶を行うことに躊躇する。状況を判断しながら適切に人と関わることに難しさが見られる。友だち同士の関わりが限定されている。身体的な不自由さがあり, 全般的に受け身になりやすい。
具体的目標(目指す子どもの姿)	成果指標	達成状況
< I 類型 > 状況に応じた会話力を身につける。 < II 類型 > 話を正しく受け止め, 人にわかるように言葉やAAC(拡大代替コミュニケーション)等で伝える。	コミュニケーション課題に関する個別の指導計画の各学期の目標で, 「目標に十分達した」, 「目標に達した」という評価を80%以上とする。	I・II 類型の全学部13名の目標達成率は98%であり, 個々のコミュニケーション課題を達成することができた。 評価 A
具体的方策(教員の取組)	取組指標	取組状況
全教員がコミュニケーションに関する客観的な実態把握の仕方を学びながら, キャリア教育支援プログラムの視点を授業実践に活かす。 * 中間期の見直し	①コミュニケーションの実態把握に関する研修を3回実施する。 ②個々の児童生徒の実態に応じた目標を考える際に, キャリア教育支援プログラムの育てたい力を参考にする。 ③学期に1回, 一人ひとりの児童生徒についてケース会を持ち, 目標や指導方法等について関係者間で協議し, 共通理解を図る。	①全教員を対象としたスタート研修と実践報告会を各1回, 各グループ別研修を8回程度実施した。グループ別研修では, 映像で児童生徒の様子を確認したり, 話し合ったりしながら, 実態把握とコミュニケーション指導に関して研修を積んだ。 ②児童生徒一人ひとりについて, キャリア教育支援プログラムの育てたい力の中から課題を選択し, 優先順位をつけ, 個別の指導計画の目標に位置付けた。 ③学期に1回ずつ実施することができた。
達成状況を踏まえた改善事項		
個別の指導計画のコミュニケーションに関する目標設定にあたっては, キャリア教育支援プログラムの育てたい力を指導の方向性として位置付けている。そうすることで, 一人ひとりのコミュニケーション課題を, スモールステップではあるが達成することができつつある。今後は, キャリア教育支援プログラムの育てたい力から個別の指導計画の目標を設定した理由などを明確に書き記すことを通して, 深く関係者で共有し, 児童生徒の育てたい力を1つ1つ養っていく必要がある。		

(Ⅲ～Ⅳ類型) 児童生徒の状況		
よさ	素直に気持ちを表し、人との関わりを好む児童生徒が多い。嬉しいことや不快なことを、表情や身体の動き、発声などその子なりの方法で表現することができる。好きなことがある。	課題 体調面が不安定な児童生徒が多い。自分なりの表現方法で伝えているが、周りの人にわかるように伝えることに難しさが見られたり、伝えたいことが自分自身明確でなかったりする。視覚障がいなどにより、周りの状況を把握できないことがある。受け身的なコミュニケーションが多い。
具体的目標(目指す子どもの姿)	成果指標	達成状況
<Ⅲ・Ⅳ類型> ・人からの関わりを受け止めて表情や発声、身体の動き等で表す。 ・発声やVOCA(音声出力会話補助装置)で自ら伝える。	コミュニケーション課題に関する個別の指導計画の各学期の目標で「目標に十分達した」、「目標に達した」という評価を80%以上とする。	小学部では81%、中学部では83%、高等部では95%の児童生徒が、個々のコミュニケーション課題を達成することができた。児童生徒によっては体調面に左右されることもあったが、スモールステップの目標を1つずつ達成していくことで、コミュニケーション力をゆっくりと身につけていっている。 評価 A
具体的方策(教員の取組)	取組指標	取組状況
全教員が各グループごとに事例研究を行うことを通して、コミュニケーションに関する客観的な実態把握の仕方を学び、指導力を高める。 * 中間期の見直し	①実態把握に関する研修を3回実施する。 ②校内研究グループで事例研究に取り組み、記録を基に実態把握や指導方法について、年6回以上話し合う。 ③校内研究グループごとに、児童生徒1名に対して年2回専門家のアドバイスを受け、指導を見直す。	①全教員を対象としたスタート研修と実践報告会を各1回ずつ実施し、希望研修でOAKの使い方を学んだ。 ②グループ別研修を8回程度実施した。ビデオを見返すことでいろいろな気づきを得ながら児童生徒の実態を明らかにした。その他、反応の少ない生徒については、微細な動きをとらえることのできるOAKを実態把握に活用し始めた。 ③コミュニケーションエイドスペシャリスト等の専門家から、6名の児童生徒一人ひとりにつき2回のコンサルテーションを受け、実態の読み取りや指導方法等について学んだ。対象児以外の児童生徒についてもコンサルテーションで学んだことを日々の指導に活かすことができつつある。
達成状況を踏まえた改善事項		
コミュニケーションの実態把握や指導力を身につけるために、外部専門家のコンサルテーションを活用することは有効であった。外部専門家からアドバイスを受けることで、対象児の今ある力と、これから伸ばしたい力が何であるかを的確に教示していただき、多くの気づきを得ることができた。結果として、対象児のコミュニケーション力を豊かにすることもできた。今後は、対象児以外の児童生徒にも外部専門家から得られた指導方法を日々の指導に活かす必要がある。		